

デザインの創造

—その方法論—

山本 登美子

何時のころからか、小説は小説家によつて書かれるものであると言う事になつてしまいました。また絵も同様に絵描きによつて作られ、音楽も同じく音楽家によつて生み出されてゆきます。こうした事は、何も《法》によつて示された事でもなく、あるいは、誰かの指令によつてなされている事でもありません。唯、個人の持つ、人間の働きの、或る部分的な発達を利用し、職業化しているのにすぎないのです。誰にだつて、小説の一つや二つ書いてみたくなる事があります。また、旅先から、絵描きでもなんでもない人間が、山の風景を友人達に送つてみたり、時には、やはり作曲家でもない人間が気随気儘にハミングする事もあるものであります。

この様な、泣いたり笑つたり、あるいは食欲を覚えたりする、純動物的な行為の外に類される人間独特の慾求、もしくは行為と言うものが発展して、現在私達が問題視しております《創造》と言う一種の美化行為と言うものが確立されて来たのであると思ひます。小説家も、音楽家も、そして美術家もこうした人間の中の創造意慾とか、あるいは、それによつて動かされる、広い意味での創造のためのテクニクと言うものの進化、言いかえますと、人よりもそれが優れていると言う事を職業として利用していると言う事でありませぬ。

現在、私達は、日常生活の中で、小説は小説家によつて書かれ、音楽は音楽家によつて作られると言う事に疑問を抱く事はまづありません。誰しも、他人の作つた小説を、あるいは音楽を、まことにそれが自然であると言つた様に、何の疑問もなく、すなおに受け入れ享樂しております。例えば、手芸的な作品、つまり、鞆であるとか、テーブルクロスであるとか、少しの余暇でもあれば自分で作れそうなものでも、何一つ考える事なく、それを買つて利用してゆきます。近代資本主義の循環体系の中で、誰もがお行儀よく生活しているのです。古く、《餅屋はもちや》と言う言葉があります。この言葉は、職業化された技術の高度さをたたえる意味から生れたものでありますが、現在では、もつと別な意味にも使えそうにも思います。つまり、本職にまかしておこうと言う事です。

分業と言う事を誰もが忠実に守り、その意味をたづねる事なく生きると言う事は、現在における、もつとも進化した、そして、一番高度で安全な生き方であるとは考えられるのですが、私は、時折、こうした体系の中からはみ出し、自分の読むものは自分で書き、そして、聞くものも、見るものも、あるいは住居も衣服も、誰に支配される事もなく自分流に仕立てて生活する事を夢みる事があります。アンドレ・マルロオ流に言えば、《空想の美術館》とでも呼びますか、自分の感性をのみ信じて一つの世界を作り上げる事に興味を覚えます。勿論、これは私にだけかざられた慾望ではないであります。誰も、まだそれとは気づかずに居るのかも知れないのでありますが、しかし、無意識のうちにも、旅に出ますとスケッチを送り、また或る時には自然とハミングするために口が開きます。

自分で小説を書いてみたいと考え乍ら、しかし、一頁の日記すら書かずに終る人がおりますが、言うなれば、失礼な言い分ですが、そうした人は未開人にも等しい存在の人だと思えます。例えば、ゴルフ用具を与えられたアフリカ奥地の土民と同様、クラブを如何に使うべきか思い悩むものです。例えてゴルフの話が出ましたが、創造とは或る意味で、一つの用具を如何に使うべきかと言う事に等しいでしょう。一つの素材を、あるいは一つのイマアジユを如

何に表現してゆくかと言う事、それは、言うなればクラブをもつてボールを如何にホールに近づけてゆくかと言う事と同じであります。

現代の生き方——こんな言葉にまで発展してしまいましたが、とにかく、現代と言う分業の完成された社会に反撥して、自分で自分流の世界を作りたいと考える人、あるいはまた、市場に供されている無数の製品、ないしは作品がどうも自分の気に入らない、何か自分で考案してみたいと考える人達のために、と言うより、そうした人達と共に、創型のための一つの方法論、それもきわめて安易な手段と言うものをここで考えてゆきたいと思ひます。

《私達が一着の部屋着をデザインする時》いや、デザインと言うよりも、一着の部屋着を作りたいと思ふ時、古代エジプト人の様に、きわめて無造作に、そして、習慣にならい、人にならつて腰衣ロインクロスを作つた様には布地を裁断しないものであります。現代から五〇〇〇年も過去の社会では、服飾的な方面では個人と言うものがまだ誕生しておりませんし、性とか、あるいは階級とかの、一つの団体を単位とし、人々はその所属する団体の持つ服装を身につけて、いたつて安心していたものであります。エジプトの時代に於いては、デザインと言う事は、風習にしたがひ、習慣にならうと言う事を意味していたのだと考えられます。エジプト時代と現代との服飾生活の異りは、こうしたエジプト人に対して、現在では全ての人が、全く自由に、そして、思ひおもひの形を自分の服装にとり入れていふと言う事にあります。例えば、街角にたたずみ、ものの十分間も歩行者を観察しますと、同じ服装の女性のない事を知るに事足りましょう。全ての人が、それぞれ何等かの智慧をしばつて《自分の気に入つたもの》をさがしあつて用いてゐるのです。

しかし、エジプト時代に於て、何の不審もなくきわめて純粹に風習にしたがつて行つていたと言う事は、デザインと言う事の上では大変重要な事であります。例えば、私達が《一着の部屋着をデザインする時》の事を考えてみまし

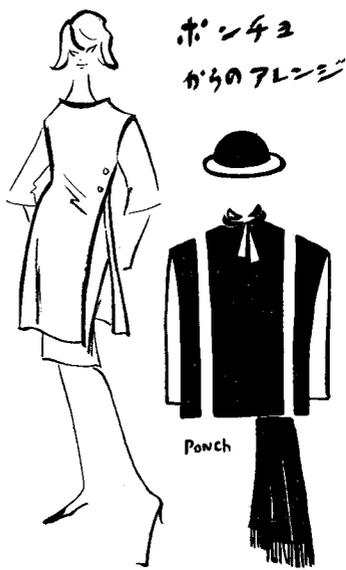
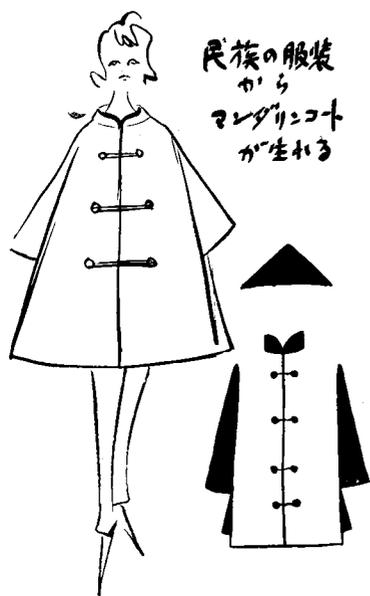
よう。まず、布地の選定にかかり、布地の色彩や性質の事について思索します。布地が決れば今度はシルエットについて考え、自分の慾望を満すべく、何等かの形態を探し出します。また同時にリボンやボタン、あるいは・ポケットやベルトと言った装飾性についても考えてみる必要があります。そうして、自分の肩の形がどうの、足の線がどうのを考え、やがては肌色についても、又自分の生活的な立場から機能性についても思い悩んでゆきます。出来るかぎり快よく適確な表現性を持つデザインでありたいと望むのですが、こうした事を真剣に考えれば考える程、デザインと言う意味の高度さのために頭を悩まされます。こうした時、最も安易な方法として、私達はよくスタイルブックを拡げるものです。無数のスタイルブックから、何か《気のきいたもの》はないものかと、自分のためのシルエットを探そうとします。とりもなおさず、私達はエジプト人と同じ行為のうちにデザインの意味を見出そうとしているのです。つまり、スタイルブックに発表されているシルエットと言うものは、すでに、隣人の作品であり、すでに誰かが用いているものであり、そしてすでに社会性を持つたものである。と考えていいからです。唯私達がエジプト人よりも倅せであるとしたら、先達となる形態がきわめて多いと言う事でありましょう。

ところで、スタイルブックに発表されているものを、そのまま受け入れると言う事は、あまりにも能のない事であると云わなければなりません。と言う事は、あくまでもデザイナーと自分とは別個の肉体を持つたものであり、したがって、趣向もまるで異なるものであります。そこで何等か自己主張《自分流のもの》を加筆する事が望ましい。今かりに、ここに一つのりんごがあるとします。ブラックがそれを写生しようとするのですが、セザンヌもシャルダンも、それと全く同一のりんごから静物も得ています。しかもなお、三者三様の作品が生まれるのであります。この、個人による異り、それが自己主張、つまり、自分流に描いたと言う事の結果であり、自己投影と言う事の重要さを物語っております。勿論、スタイルブックに発表されているものを、まるで同じ様に求めると言う事が悪いと言うのではあ

りません。いずれにしても優秀なデザイナー達の作品であり、信頼すべき感性によつて形作られたものであります。唯、その上、わずかばかりの努力があれば、なお一層よくなるであろうと言う事であります。例えば、これはスタイルブックからの暗示とは異なりますが、メキシコ人の常用してきたポンチョが、ほんのわずかばかりの修正が加えられた事によつて、きわめて現代的なものとして、それが原型の持つイマアジユをそこなう事なしに再現されて来ていますし、また、マンダリンコートにしてみましても、その原型からまことに巧妙な転身を見せるものとして作り出されたものであります。余談になります。アンデルセンに《即興詩人》と言う作品がありますが、森鷗外が邦訳していますが、或る主義者に言わせますと原作よりも訳文の方がいいと言う事であります。不思議な事ですが、大変歓迎されるべき事ではないでしょうか。

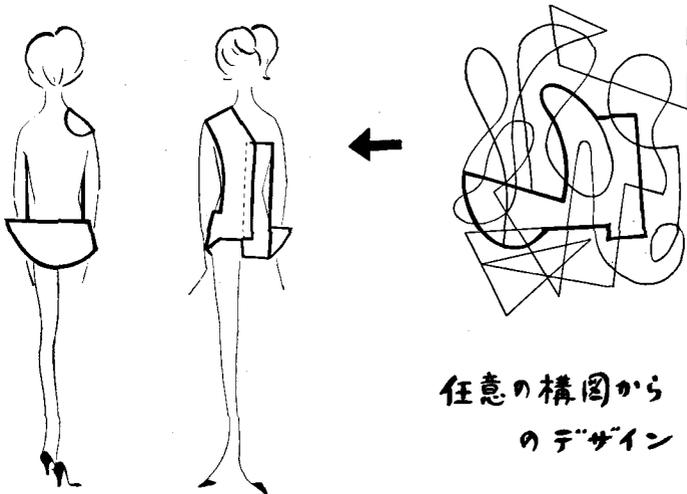
《樹木が根と同じ様に樹冠を形成しなければならぬ》
 と思うものは一人もいない。誰にでも上と下との間には鏡に映つた様な正確な相似は少しもないと言う事はわか

デザインの創造



るであろう。相異つた領域における相異つた機能は激しい差異を示すに違いないと言う事は明らか事である。芸術家は、幹という指定された場所、深みから湧きあがつて来るものを集め、そして搬んでゆくだけだ。仕えもしなければ支配もせず、媒介するだけだ。以上は、パウル・クレエの《近代芸術について》の中の言葉であります。芸術家の位置と言うものを、きわめて巧妙に表現しております。芸術家とは一つの幹の様なものです。地下にあるものが、やがて幹を通過して、樹冠という美を形成するのですが、その美とは芸術家そのものではなく、芸術家とは、地下にあるものがやがて地上で一つの形を作りあげる媒介をするだけであると言うのです。そして、芸術家の手によつて、素材と言うものがまるで異つたものになつてゆくと言うのであります。このクレエの言葉の中には、芸術家の位置と言う事だけではなしに、創造と言う事の意味が蓄えられていきます。一つのりんごが、異つた幹、つまり、セザンヌと言う幹、シャルダンと言う幹を通過する事によつて、まるで異つた世界のものとなります。そうした事の意味を、パウル・クレエは、分解し、説明するのではなしに、まことに美しい言葉で象徴しております。

さて、本題にもどりますが、クレエの暗示する様に、私達は何もスタイルブックに限られる事なく、どんなものからも、デザイ

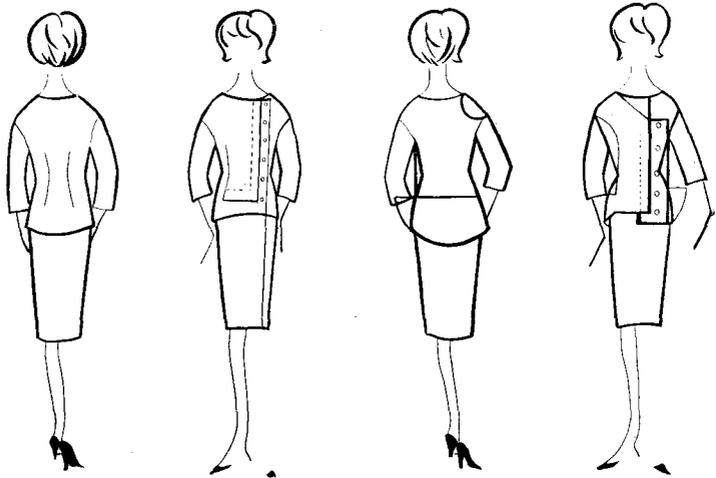


任意の構図から
のデザイン

ンの前提をひろいあげる事が出来ます。ウォーター・ヒヤシンスが水気ばかりの泥から生い立ち、シャボテンが、それとはまるで異なる、ほとんど水分のない砂地で育つ様に、如何なる土壌からでも植物という形が形成されてゆきます。かりに、私達がデザインの隘路に立たされ、そして思いあぐんでいる時に、窓を横切りつつある雲の形が、突然一つのシルエットの暗示にならぬとも限りません。広漠たる砂漠の乾燥と、その熱量のもとに、あの豊麗でロオマンな花が開く事も、また、ドラクロアのでまるで情熱的な雲の形から清楚なカクテル・ドレスの暗示を受ける事も、それは創造と言う舞台の上では相似のものであると考えられるのであります。

私達はこうした事からデザインのイマアジュを出発させる事があります。雲の形、樹冠や木の葉や冬木立の姿、そして又、偶然に生まれた水たまりやインキのしみ跡など、全てがデザインのためのアイデアをふとらせてくれます。それに、服飾のデザインと言う事は、単にシルエットの決定だけではありません。布地のマ

チェールや、色彩の選択もデザインであれば、ボタンや、アップリケやポケットの大きさやその形を描く事もデザイナーの手にゆだねられているのです。或る時には、アップリケやポケットの形など、こうした自然界の、まるでネガ



チヴな形そのままの借用ではなかつたでしようか。

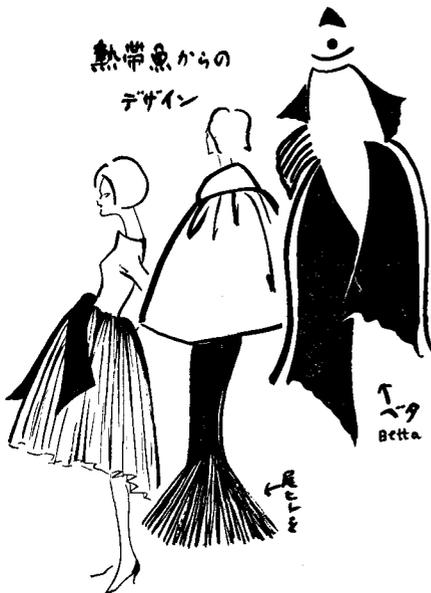
スタイルブックの或るシルエットから、それとは別な、少しばかり考案の跡の見えるシルエットを作り出すと言う事は、音楽的に言いますと、変曲の方法論を踏むものであります。クライスラーが或る曲をヴァイオリン曲として変曲し、或るジャズマンがクラシック作家の或る作品をジャズ風に変曲する、そう言つた事は、音楽に於いては音楽的なモチーフを、別の様式の中に組み上げようとする事であり、スタイルブックからのアレンジメントと言う事もこれと同じ事であり、或るシルエットの中から一つの《自分の気に入つた》主題を抽出し、それと異つたシルエットとして、あるいは異つたシルエットの中に、描きあげてゆくのです。ところで、ここでは全く異つた立場からのデザインについてお話ししております。自分が、一つの形の決定の過程において困惑している時に役立つであろうと思われる事であり、また、だからそれをむしろ積極的に利用してゆこうとする態度のお話しであります。《感覚と啓示である》とブラックは言いますが、とにかく、私達は常日頃から、デザインの世界とは全く異つた世界についても関心を持ち、たえずフォルムについて考えている事が望ましいものであります。

《私達が一着の部屋着をデザインする時》のために、巨匠ロダンは次の様に語つています。《耐えしのびたまえ。靈感をあてにしたもうな。靈感は存在しないのである。芸術家たる唯一の特質は叡智であり、注意深さであり、真摯さであり、意志なのである。あたかも律義な職人のごとくに、君達の仕事をなしとげたまえ》ロダンの言う様に、全く律義な職人の立場から事物を見てゆく場合、一片の流木も、またごくつまらない排物すらもデザインの啓示になり得ると言う言い方は大袈裟ではないでありましょう。かつて、私達は流行の歴史の上に、ペン・シルエットと言うものを見ました。ペンとは、デザインのために作られた玩具ではなく、明かに文具用品でしかなかったものですが、意深い職人の手によつて、ペンの印象、ペンの持つ格好なフォルムと言うものが婦人達のために縫い上げられたので

あります。スピンドルラインも同様、もともと、紡績工場の片限にあつたものにすぎません。《ふとした印象の重要さ。真実らしくないもの、それがしばしば真実そのものなのだ》ボナールはこの様に言うであります。私達のデザインと言う法延に於いては、雲も、水たまりも、あるいはふとした落書、ないしは、任意の形なども重要な証人になり得るものであります。そして、私達は、こうした素材達にかこまれて単に部屋着のためのデザインにばかり凝るのではなく、時には、こうした素材を系統立てて集めながら、ムソルグスキイが《展覧会の絵》を書いたと同様、幾つかのシルエットを集める事によつて一種のデザインの組曲を縫い上げる事も可能ではないでしょうか。

例えば今ここに、一群の熱帯魚がいると仮想してみましよう。藻と、人工のやわらかい光に満たされた水槽という世界、そのせまい世界の中で、色とりどりの、そして、おそろしく形のまちまちな魚達が、しかし、或る一つの共通した情緒のもとにつながれて泳いでいます。注意深く、そして真摯に私達はその熱帯魚の容姿をおいつめます。

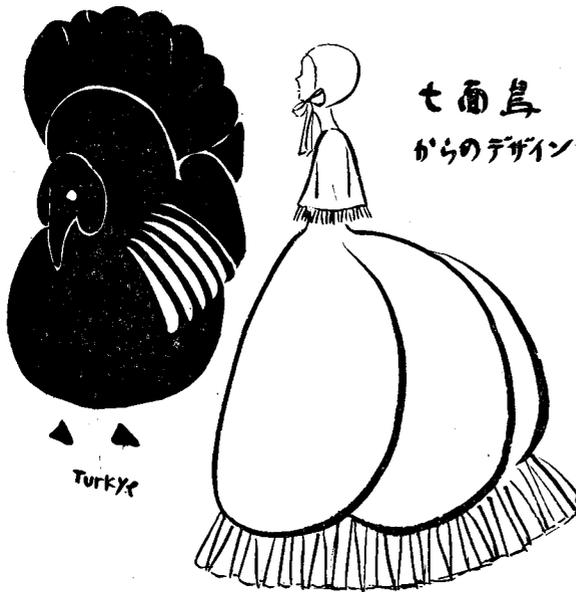
エンゼル・フィッシュは広い水圏を占め、ベタは底に休息し、また、スマートラヤクラウン・ローチはその間をせわしげにかけめぐつています。そのいづれをとつても、私達は彼女達から容易にデザインを盗用する事が出来ます。小説家が、その小説家の眼を以つて人生からドラマを抜き出したと同じ様に、私達のコンテは熱帯魚の一群からカクテル・ドレスやイヴニング・ドレスと云うドラマを仕立てます。エンゼル・フィッシュの、あの張



りのある量感は、かりに派手な社交家のために作られてもよろしいでしょうし、また、ベタの、あの巨大なりボンとその重々しい赤さは、中年の淑女に、そして、若い女性のためにスマートラの可憐なアクセント、クラウン・ローチにしてみれば、さしづめ、タイトなドレスに派手なボーを結んでいる………。これらは魚達だけにかぎった事ではなく、貝類についても、鳥類についても、私達は系統立つたデザインのためのコンテを向ける事が出来るでしょう。そしてこうした自然界の生物達を観察する事を通じて、私達は単に形態をのみ学ぶだけではなく、同時に色彩と運動とを学ぶ事が出来るはずでず。それに、こうした事

によつて、応々にして、私達が卓上で他人のデザインをひねりまわしている時より、きわめて、新鮮な結果を得る事が多いし、また、服飾的な因習にとらわれる事なく、全く自由な啓示を受けるものであります。例えば、亡者の供の鳥を見て、私達が喪服につややかな玉虫の反射を持つ黒を思い立ち、胸赤燕をみて、燕尾服のチョッキに赤いタータンチェックの落書を考え出すとしても、創造と言うドラマの上では決して非礼にならないものです。あるいはまた、それが願つてもない事かも知れないのであります。とにかく私達は貪慾な眼でイデーの発露を見出そうとします。一群の熱帯魚からデザインのための形態をうる様に、かつては、デオールがアルファベ

七面鳥
からのデザイン



ットに線を得ました。また、カルダンやラ・ロッシュによつて投縄ライン、フープライン、扇子ライン、そして吐水ライン等々がピックアップされたものであります。こうして自然界に主題を求めるのは、私達の服飾のデザイナーにのみ限られた遊戯ではありません。ベートヴェンは田園の風物から巨大なメロディーを得ており、また、ルナールは一冊の随筆をものにしてあります。七面鳥について《あたかも帝政時代の暮しでもしているようだ》と言ひ、《どんな女も、七面鳥ほど上手に裾はまくれまい》と言ふルナールから、もしも文筆の業をとりあげ、服飾デザイナーのコンテを持たしたとしたら、あるいは彼をして、豊麗なペチコートデザインのデザインをさせていたかも知れないでありましょう。一着の部屋着をデザインするために、いや、一つのシルエットを求めめるために私は随分遠廻りな、そして沢山の文字を使つて一つの方法について話して来ましたが、それらは全て、単に《一つの外型》を得るためのごく安易な手段と言ふものに外ならないのであります。何故なら、デザインとはもつと大巾な行為を指して言ふものでありますし、単に外型をととのえると言ふ問題だけにとどまらないのであります。もつと多面的であり、その多面的な要素間の力関係と言ふものを意味するからであります。初めには、デザインと言ふ事の意味の高度さのために頭を悩まされると言ひましたのは、このかぎりない要素に一つの快よい秩序を与えると言ふ事の困難さを言つたものであります。かぎりない要素と言ふもの、例えてここに思いつくままに拾ひあげてみますと、それは、外形、色彩、大きさ、装飾、マチュール、個人の肉体的な差異、用途、個人の年令、等々と、文字通りかぎりないものであります。私達は、こうした要素を、あたかもクロスワードパズルの答を組む様に、一つ一つを吟味しながらおし並べてゆかなければなりません。クロスワードパズルの答を組むと言ふ事、一つ一つを吟味しながらおし並べてゆくと言ふ事、それが、全ての要素に一つの秩序をあたえると言ふ事であります。例えばそれは囲碁の様なものです。囲碁における一つの石と言ふものは、さほど重要な存在ではないものだと考えます。その石が重要な役割をあたえられるには、あるいは、その石

が単なる捨石ではなくなり、やがて戦局を左右するエネルギーを持つに至るためには、その石と相関連し、その石に助けられ、またその石を助けつつある幾つかの他の石が必要なのであります。そう言つた事から一着の部屋着をデザインする事のために必要なもの、それは実はエンゼルフィッシュの《あの張りのある量感》やベタの持つ《あの巨大ナリボンとその重々しい赤さ》と言うものではなく、もつと別なところにあるのではないかとひるがえつて考えなければなりません。

《小説の愛読者達に低級とか高級とか言つた等級を付ける事が出来るとすれば、低級な読者達は小説の筋、つまり主人公達の行為の連続を読みふけるものであり、高級な読者達はそうしたストーリーによつて作られる世界像を見るものである》これは、小説のための或る批評家の言葉でありますが、私達の仕事も、実はこうした言葉の裏返された世界にあるものです。小説家が単に事件の推移のみを目的として筆を取らないのと同様、私達のコンテも、単に一つのシルエットを描くために残されたものではありません。一つのシルエットによつて表現される《理想的なイマアジユ》そのものを描かなければならないものであります。大切な事は、デザインされたものが、一つの歌をかなで、一つの詩を含み、そして一つの絵でなければならぬと言ふ事です。バッハの、或る《フウガ》の快よさをとらえて、優しいアクセントのリフレインするスカートをデザインする事を思い立つ時、デザイナーは何もそうしたやわらかさの作品を老人や修道女達のために着せる事を考えないものであります。この時の注意深い感覚こそ《或る理想的なイマアジユ》の母体となるものであります。ところで、こうした分析的な論理で《一着の部屋着のためのデザイン》に関する方法論を進める事は、私達実技者にとつて容易ならぬものであります。また、ハーバート・リードの《芸術は決して現実を全体として把握しようとするところみではなかつた。そんな事は人間の力を越える。芸術が外観の全部を再現しようとするところみであつた事さえ決してない。そうではなく、芸術はむしろ、人間の体験における有意義なもの

の、一かけらずつの認識であり、そのゆるまぬ定着であつたのである」と言う言葉も、ここではきわめて難解な料理に手を下しつつあるコックを傍観する単なる観察者の言葉にすぎないのであります。私達は、この問題についてはもっと簡単に考えていいものでありましょう。均整の取れた線を引く感覚、好みのいい色彩を選ぶ感覚等々の、私達が常日頃何気ない台詞として使う《センス》と言う言葉で代表されるものを、そつくりそのまま信じて生きてゆく事だけで事足りるのではないでしょうか。小林秀雄流に言えば、過度の自己分析は有害であろうと言う事です。しかしまた、こうした問題については、——どうも否定に否定を重ねる論理によりますが——私達は常に注意深く心がけていなければなりません。私達は、何を感じ何を目的としているか、と言う事を、常に反省していなければならぬものです。例えば、ゴッホの《ひまわり》の絵を見て感に打たれ、この様な感動をこめたデザインをしたいと思う時、私達は、自己の感動の第一要素がその《ひまわり》の絵の何によつて作られているかと言う事を考えなければなりません。私の感動のための原因、それはあるいはゴッホ独特のタッチかも知れず、あるいはまたその主題である黄色い色調であるかも知れません。私達は、その感動の対象、つまり《ひまわり》の絵を丹念に観察する。そして、私達は自己の感動の原因を分析し、それをきわめて注意深くデザインするものの上に縫い込んでゆかなければならないと言う事であります。先に引用した様に、かつて、アルファベット・ラインと言うものの流行をみましたがこの様な意味のもとに現在その史実を反省してみますと、心あるものにとつては何か物足りない気が湧いて来るはずであります。何故、アルファベットに、一つのシルエットの原型を見出したか、と言う問題はいわゆる芸術論的な見地からすれば、はなはだ根拠のないものではなかつたでしょうか。もっとも、服飾が芸術であつたと言うのではありません。唯私達は、服飾を芸術上のものとして考え、またその様に努力しても決して罪にはならないものでありますし、また、芸術家達がその作品のために自己の精神を全く投入していると言う事が服飾におけるデザインのための方法論として

きわめて有効であると考えられるのであります。誤解をさけるために、ここで一つことわりを言っておきましょう。アルファベットのの上に一つのシルエットの原型をみとめたと言う事は、しかし決して非難されるべき事ではないのです。セザンヌが、三角形の構図を取りあげた事の意味と何一つ変るものではないと思われるのですが、唯、アルファベットのラインと言うものの流行の上において、単にこの構図だけの流行だけがみとめられたと言う事が私には解釈に困るのであります。

《一着の部屋着をデザインする》そのために、最後に私は次の事を言つて筆を止めましょう。ハーバート・リードが言う様に、線の芸術、輪郭の芸術と言うものは先史時代の芸術であつて、現代時々言われる印象主義的芸術ではないのであります。熱帯魚の一群を見た一人のデザイナーが、ベタに魅せられ、真赤な、そして重々しいリボンを持つイヴニングをデザインする事は、ここでは先史時代的な考え方であると言うのであります。私達は、こうした単なる《書取》の宿題からはすでに成長してしまつております。私達にあたえられた新しい宿題と言うもの、それは一つの印象を表現すると言う事でありませう。叡智と、注意深さと、そして真摯さを以つて、なおかつ律義な職人のごとく、一つの感動をデザインの上に印象づけられる様、丹念な縫取りをしなければならぬのです。

① アンドレ・マルロ

一八九五年、パリに生まれる。小説家として《人間の条件》を書いたが、政治活動においても、ドゴール將軍下の参謀として有名。昭和三十三年には二度目の来日。

② シャルダン（一六九七～一七七九）

パリに生れの画家。代表作のほとんどが静物画と風俗画であるが、静物画に於いては、新しい一つの視野を開いたと言われる。

③ パウル・クレエ（一八七九～一九四〇）

スイス生れの画家。表現派に属し、マルクやカンディンスキー等と《青騎士》のグループを組む。

④ ハーバート・リード

一八九三年、ヨークシャーのキルビー・ムーアサイドに生まれる。英国きつての美術評論家であるが、その著作のほとんどが詩論や文芸評論、あるいは政治論等の属性を帯び、きわめて広い視野を持つ人である。

本学助教授 被服学